

兄かもわからない

榎本ユミ

男子子を生むはずだつたと常夜灯の暗さが母を語らせて いる

輪郭はばやけはじめて「あのときの子を産んでたらあなたはいな」
さざなみの寝息を立てる母はまだいまのわたしより若い女で

ふたりとも産んでくれたなら呼んだかもしれない兄よ 朝蜘蛛は跳ぶ
その日から巨大な兄があらわれて窓いっぱいに笑つたりする

てのひらの温め方がわからない「素直じやない」と叱られるたび

どうしたつてわたしの拳は丸っこい 割りたいガラスがたくさんあるのに

夜のようく重い毛布でひとしきり泣いたら兄はすこし遠のく

わたしから湧き出るようにおぼろ雲 すき間だらけの大人になりぬ

この服はまだ着るからといつまでも母は抜け殻ばかり大事に

うまれない兄の遺品と呼べるのはそれを宿した身体しかなく

いつの日か廃墟になるのに母はすぐなんでも醤油でびしゃびしゃにして

夢でだけ母の裸体の豊かなり もう胃液しか出るものがない
愛されていたとは思う怖くない童話ばかりを読んで育つた

狼になりたい山羊を傷つけず丸呑みできる大きさほどの
左手で右手の爪を切るときのテンポで家をでようと思う

コーヒーの甘さに気づいた日のような始まり 拳をみんなほどいて

ストールをきれいに羽織るビル風がそれを手伝う催花雨の朝

決めたのは自分だけれど乗り込めば大きく傾ぐ小舟のような

iPhoneをスクロールすればあかるくて兄のことなど知らぬひとたち
ソーセージごと半分にできる手が好きだと告げてパンを受け取る

夢だつてだれかが言つてくれないと船酔いをしたままのたましい
ほんとうは生まれてこないはずだつたとパスタを茹てる背中にむけて

大丈夫だからとあなたが言えば〈眞実の口〉と称して指を甘噛む
妊娠すれば兄かもわからない鶏肉にフォークの穴だらけ

鍋肌に焦げるバターを見守つてふたり暮らしの期日は決めず
さびしさはすぐに大樹に育つからいつかあかるく振りかぶる斧

嘗巣の歓迎される燕いて雨は季節の花へこぼれる

車窓から途切れ途切れに日はさしてもつときちゃんとまぶしがりたい
空腹の春にだけ会う葬列のいちばん最後にいつもいる兄



発行者：榎本ユミ／2018年より作歌開始。2019年より塔短歌会。「たんたん拍子」「絶島」同人。

本フリーペーパーをお手にとってください、ありがとうございます。

塔短歌会の結社の賞のひとつである塔新人賞の候補作となりまして、「たくさんの人人に読んでもらいたい」という選考委員の声に背中を押されて、フリーペーパーといたしました。感想など頂けると大変うれしいです。